

**第5回昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画策定委員会  
議事要旨**

< 日 時 > 令和7年2月5日（水）18：30～

< 場 所 > 昭島市役所 庁議室

< 出席者 >（敬称略）

**【 委 員 】**

松本 祐一（会長／多摩大学経営情報学部教授、多摩大学総合研究所所長）、北村 実（副会長／あきしま・街づくり市民会議・なかがみ会長）、秋山 伸子（昭島ボランティアセンター運営委員、民生委員・児童委員）、伊藤 正人（昭島市消防団団長）、岩下 亮平（社会福祉法人 昭島市社会福祉協議会地域支援係長）、大山 弘一郎（OK プロジェクト実行委員会メンバー）、高田 英梨紗（昭島市リーダーズクラブ（ALC）代表）、高橋 靖和（昭島市自治会連合会会長）、倉持 伸江（東京学芸大学教育学部 生涯教育分野 准教授）、幸田 義康（公募市民）

**【 事務局 】**

枝吉 敦子（市民部長）、山田 恵理（生活コミュニティ課長）、伊藤 奨（市民活動推進係長）、若名 高彰（市民活動推進係）、永瀬 万愛（市民活動推進係）

**【 傍聴者 】**

2名

< 配布資料 >

－机上配布－

- ・昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画（素案）に係るパブリックコメントの結果について
- ・昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画（案）

< 議事要旨 >

**1 開会**

**【 事務局より連絡・報告事項 】**

**2 議題**

**(1)パブリックコメントの結果について**

**【 事務局よりパブリックコメントの結果について説明 】**

委員長：

パブリックコメントの結果については事前に皆さんに送付をし、内容等確認いただいている。追加で質問はあるか。

高橋委員：

学校避難所運営委員会があくまでも、家が倒壊して住めなくなった場合の避難所運営。水害などにおいては、行政が避難所を設ける。なんでもかんでも学校避難所運営委員会と言われてしまうとそうではない。

事務局：

パブリックコメントの結果についてはこのままとさせていただく。議題（２）計画（案）の総括として、８ページの避難所運営委員会の内容を見ていただき、ご意見をいただきたい。

## （２）計画（案）の総括について

### 【 事務局より計画（案）について説明 】

委員長：

改めて修正・追記の部分を見ていただき、気になるところがあれば意見をいただければと思う。

高橋委員：

学校避難所運営委員会について。この避難所というのは地震で家屋が倒壊し住めなくなった場合の避難所の運営ということ。避難所という言葉だけがひとり歩きしてしまっている。細かいことは載せられないにしても、地震、災害時には避難所運営委員会で地域を守っていくみたいな文言の方がいいのかなと思う。

あくまでも市長が避難所を開設すると宣言してからでないかと立ち上がらない。地震で家が倒壊したとき、住めなくなったときに仮設住宅ができるまで避難所として、学校や体育館などに仮に住んでもらうという運営。ただ揺れたら集まればいいのかという捉え方をされてしまうのが問題。

自治会員もよくわかっていなくて、なんでも避難所に行けばいい、運営委員会だ、となっている。そうではなくて、まずは自宅が大丈夫であれば、自宅避難。あくまでも、被災して建物が倒壊し、家が住めなくなった場合の避難所運営。

幸田委員：

12月に成隣小学校でも学校避難所運営委員会をやった。成隣小学校地区は3000～4000世帯ある。しかし体育館に入れるのは50世帯ぐらい。じゃあ誰が入れるのか、早いもの勝ちなのか、万が一たくさん来てしまったときに、自分たちがさばけるのか。自分の家が倒れていても運営委員会として来ないといけないのか。また、避難所はすぐに開くわけではなく、まず、市からこの建物は大丈夫という診断を受けてから鍵を開けることになっている。それまで自分たちはどうしていればいいのか等、色々な意見が出ていることが実情だということはつけ加えさせていただく。

委員長：

今みたいな話を学校避難所運営委員会で議論しているということか。

幸田委員：

学校避難所運営委員会では、受付ではこういうものがここに入っているから、それを出してやってくださいね、というような話だけ。基本は、自分の家が倒壊していたとしても、例えばテントを買ってもらって、元気な人たちはそこで待機してもらおうとか。実際には入れないから。あくまでも体が不自由な方などを優先してくださいねと。それならみんなテントを買わないとだめだね、みたいな話をしている。

委員長：

行政が作った制度だから、どうしてもそこにはまらないことはたくさんある。その時に、それをどうするかというのは、地域の知恵みたいなのところもある。当然ながら、なんでもかんでも、そこにはまらないことは自治会でなんとかしてというのは、限界があるし、よろしくないと思う。しかし、そういう課題があるときに、それをどこで話し合えばいいのかとか、どこで誰が関わるのかとかを話すような機会がないと、今の話を聞いても、うまく回らないなという感じがする。

高橋委員：

これは地震で家が倒壊している人たちの避難所だということをわかるように足してもらわないと。何でも避難所だとなってしまうと、押しかけられてもどうにもならない。

大山委員：

今のお話は、この計画ではなくて防災の計画の方で話し合われるべきかと思う。

高橋委員：

この計画に載っていなければ何も言わないが、学校避難所運営委員会があるというPRされるのであれば、その前提はうたっておかないと。

大山委員：

「地域の多様な主体の紹介と現状」という項目なので、地域にはこういう団体があって、こういう活動をされています、という紹介だけだと思う。活動の内容まで、特にはないと思っていた。

高橋委員がおっしゃるとおり、すごく心配はあるのだろうとは聞いていて思う。幸田委員が言っているとおり、まさに実情とは合っていない。高齢者や体が弱い人は福祉避難所に行ってくださいという話になっているはずだが、ごちゃごちゃになっていて、いざ震災が起こらないとわからない計画を立てているのではないかと思う。

ただ、この各論部分をどんどん突き進んで話し合っていくのは防災計画と思う。この計画では、こういう団体がありますというところでもいいのかなと思う。

委員長：

学校避難所運営委員会があること自体も知らない方も、もちろんいらっしゃるだろう。

事務局：

各委員さんからご意見を頂戴した。大山委員がおっしゃるように、ここではコンパクトに紹介しているというところがあり、高橋委員にもご理解いただいているように、深く書けるような項目ではない。そのため、一文追記という形で担当課と調整を図りたいと思う。

また、高橋委員、幸田委員のご意見である、実際に災害が起きたときに、この学校避難所運営委員会が本当に回っていくのかという心配感は、市全体として抱えているところだと思う。「多様な主体の連携」という本計画の視点から見ると、今の学校避難所運営委員会に欠けている要素、欠けている地域の方、意見があるのであれば、そこが加わっていくことで、もう少しリアルに即した議論になるのではないか。いただいた意見を、担当課に共有しつつ、いつ起きてもおかしくない災害に対して市全体でどう進めていくかというところを考えていきたいと思う。

高橋委員：

もう一点。最初のページで外国人住民を追記した。昭島市で外国人住民はどれぐらいの割合でいるのか。

岩下委員：

外国人住民の問題に関して。昭島市の人口は11万人ほど。その中で外国人住民は3000人ぐらいのため、割合でいうと本当に少ない。しかし社会福祉協議会にある昭島ボランティアセンターでは、昨年度の相談の約2割は外国人支援に関するもの。市役所の中に外国人住民に対応できる窓口がないところが課題かと思う。社会福祉協議会と繋がっていて、協力してくれるボランティア団体は市内に2団体。その2団体をお願いをして支援していただくという流れになるが、行政のフォローがそんなにない。社会福祉協議会でできる支援にも限りがある。支援している団体の方も、すごく疲弊している。それでもまた新しい相談者は来る。なかなか対応がうまくいかないという感覚を社会福祉協議会では感じている。

委員長：

他の自治体でも同じ問題を抱えている。対応するところがないというか、対応しきれないというのがどこのまちでも言われている。これは新しいコミュニティの課題になっていくだろうと思う。ここであえて外国人住民という言葉を入れて、それを意識してもらおうということが大事かと思う。

余談だが、大学も留学生がすごく増えている。そのため今後、大学の周りに住む外国人留学生もすごく増えてくると思う。他の大学でも多分同じ傾向があると思う。そういうことも含めて、大きな傾向になってくると思う。

岩下委員：

外国人支援で言えば、立川、日野、八王子などは、行政が団体にお金を出して、民間団体でも多文化共生センターのようなものを運営をしているところがある。昭島にはな

い。福生では、日本語学校があり、外国人を支援するところがある。

昭島市に住んでいる人は昭島だけで生活するわけではなく、隣の市などにも行き情報を仕入れてくる。そうすると、なんで昭島にはないのだろうと。住民は知っているけれど、支援する側であったり行政だったり、外国人支援に対する知識も足りていないし、課題意識も低いのかなと感じる。

倉持委員：

27 ページのコーディネーターの拡充のところ。発掘や育成という言葉が2の方にあるため、さらに拡充というと、どういう違いがあるのか補足説明いただければ。

事務局：

元は、福祉分野のコーディネーターを増員するという記載だった。しかし、様々な分野でコーディネーターが必要であり、今後、各種コーディネーターを拡充していくことを検討していく意味合いを含め修正した。

大山委員：

私がここの部分について意見を出した。生活支援コーディネーターは、65 歳以上の高齢者の地域における生活支援のサービスについて課題を抽出して、その地域の方に投げかけて、コーディネートしていくみたいなこと。全体で考えると、地域福祉コーディネーターの方がその役割を担う可能性もある。生活支援コーディネーターの増員と書いてしまうのは疑問を感じる、と意見を出させていただいた。

委員長：

今回、総括ということもあるため、委員の皆さんから、これまでの会議、または実際の計画作り、中身も含めて感想や言い足りないことを言ってもらいたい。総括的に皆さんからお話をいただきたい。

秋山委員：

文章がすごく難しいというか、最初は読み解くのに言葉使いがわからなくて、3 回ぐらい読むとどういうことを言っているのかがだんだんわかるようになってきた。地域の暮らしとか福祉のこととか、そのあたりぐらいしかピンとくるところがなかったが、市民が元気になる過程を考えているのだなという感じを受けた。自分たちが地域に関わって色々な活動をしているということはすごく重要。自分たちがやっていることが、文章としてこんな形に表現されてまとめるんだと、目が覚めるような思いだった。

伊藤委員：

戦略的な方向性というのをこの推進計画で決めて、具体的な戦術みたいな話はこれからまた別個にやっていくのかなという理解に至った。つい細かい具体的な話の方に偏りがちになってしまうことが、大体の方向性をこういう形でまとめられてよかったのかなと思う。

岩下委員：

コミュニティというものは具体的なものもないし、広すぎるため、どこに落とし込ん

でいくのか、最初はなかなか大変だった。

コーディネーターについて、社会福祉協議会の職員、市役所の職員、民間の事業者の人がやっている、というような認識もあるのかなと思う。しかし、地域の活動者もコーディネーターになれる。むしろそこに期待している部分も大きいと思うので、そういうところが、この計画により地域の人にも伝わっていけばいいなと思う。

この計画は、生活コミュニティ課だけではできないし、全庁的に連携を図っていかないといけないと思う。市役所の中でのコーディネーター役というか、横断的に見ることができるような人がいないと、実行していけないのではないかなと思う。数値目標がないため、どこまでやったらいいのだろうかとか、どこを目指しているのだろうかというところが曖昧なので、そこは、今後それぞれのコアな部分で話し合っていくと思うが、より良いものができればいいなと思う。社会福祉協議会もぜひ協力してやっていければいいと思う。

幸田委員：

東京でもいつ地震が来るかと非常に騒がれている。しかし、くじらもそのままの形で残っているぐらい昭島は昔から地盤が固いと言われているため、昭島は大丈夫だろうと思っている方がすごく多いと思う。1月中旬に宮沢町自治会で福生の防災士を呼んで防災訓練をやった。その方は、東日本大震災、能登半島地震などにもすぐに駆けつけた東京消防庁0Bの人。その方の話では、能登の皆さんが言っているのは、まさか能登で地震が起きるとは思わなかった、ということ。震源地がどこになるかわからない。関東大震災は江戸川の方で起きて、昭島は大丈夫だったと言っているが、次は昭島の下で起きるかもしれない。だから、いつでも震災に備えないとだめだという話を聞いた。

我々も自治会だけではなく、色々な地域団体も交えてやっていかないとだめだという話をしている中で、一番問題なのは今の社会情勢。昔は60歳定年退職で、そこからみんな地域のができた。しかし今はみんな65歳まで働いている。65歳になっても会社を辞められないで、70歳まで働けと言っている。いつ地域に出てくることのできるのか。どこの自治会も同じだと思うが、役員のなり手がいない、イベントをやっても全然出てきてくれない。

この計画ができたらずい市民の皆さんに読んでいただいて、少しでも地域のそういった活動に、協力できるところは協力しようというような気持ちになっていただければと思っている。

高橋委員：

地域の防災力はかなり低くなっていると思う。行政からすると、自治会は使いやすいため、防災をみんな自治会に丸投げしてしまっている。うちの地区の学校避難所運営委員会は自治会しかない。他の団体も入ってやっているところもあるにはあるが、そういう偏りが起きているのが弱くなっている一番の原因だと思う。市民もボランティア精神があるようでない。能登で震災が起こったので義援金は送ります。と言うけど、隣近

所が困っていても知らん顔。自治会も損か得かでしか見られない。損か得かでやっている会ではない。人の心が少しずれてきているのかなと思おう。まずは、この人の心のずれを何とか正常なところに戻していけるようなことができればいいなと思っている。逆に言うと、震災がないと人の心は治らないのかという思いもある。震災があって会員が増えたからと言って嬉しいかと言われると、それも嬉しくはない。安全・安心で会員数が少なくなって嬉しいかというところもそうでもない。着地点がなかなか見つからない状況ではある。皆さん、割と昭島は安全だという意識が強いため、どこかで誰かが、注意してくれということをもっとPRしていただけるとありがたい。

まちを守っていくのはやはり住人だと思うし、これは行政だけがどうこうする問題じゃないというのも市民もしっかり理解してもらおう。2019年の台風のときのように、避難所に来てあれ出せこれ出せ、寒い、喉が渴いた、腹減ったと言いつつ出さないような避難民を作らない。水害のときは事前にわかるため、荷物を持って避難所に行ってくださいという教育・指導をどこかでしていただければありがたい。

自分だけよければいいという人が増えすぎてしまっていることがこれからの課題。なんとかみんなで長く生きていけるような地域にしていけたらいいなと思う。

大山委員：

今までもいくつか策定委員会などに出させていただいたが、どちらかというと計画ありきで承認していくような会議が多い。しかし幸いにもこちらの委員会では活発的に話したことを取り込んでくれて、当初の計画案から比べると大幅に違って、ここで話し合われた内容をすごく尊重していただいているのだなと思っている、感謝している。

一方で、自治会加入率の問題だったり、プライバシーの問題で繋がりがたくない人たちが多くなっていたりする中で、それに逆行するような計画を立てているため、どこか窮屈さがあったりするとすごく感じていたところはあった。

先ほど幸田委員からもあったとおり、3000世帯住んでいる地域で50世帯ぐらいしか入れないとか、計画を作るための計画が多くて、実際その場に行ったら全然役に立たない計画が、残念ながら行政には多すぎると思っている。

昔は敬老大会でもなんでも、なにかをやるとなると休みの日でもみんな出て手伝いに行かなきゃ、というような感じだったと思う。しかし、今は部署ごとになってしまい、働き方の問題もあるから必要以上に職員を駆り出せない。地域包括支援センターでは、休日に出て、他の日休んで、とやったりしているが、実は市役所の職員が一番出てこない。計画をどんどん率先して作ろう、皆さんお願いします、と言っているサイドの人たちが実は一番興味がないかもしれない。コミュニティのことも、市の職員が昭島市内に何人いて、そのうち何割が自治会に入っているかという、愕然とするような数字が出てきそうな気がする。

皆さん貴重な時間を割いて集まって、色々な意見をいただいていい計画ができていけるのであれば、先ほど、岩下委員からも、全庁で対応してもらいたいという話もあ

ったが、市の職員も一緒になってコミュニティに関して考えていただいて、参加していただけるような計画になればいいのではないかと感じた。

高田委員：

内容が難しくて全然理解できない部分があった。勉強になった。自分はボランティア活動をすごくしているし、妹も一緒にやったりしているが、周りの人たちはやらない人が多い。自分から声をかけてみるのも、ボランティア活動している一員として大事なのかなということを改めて感じた。

倉持委員：

高田委員と同じで、大変勉強になった。こういった計画では、多様な主体とか多様な活動は色々あるということを使うが、具体が見えづらいと思うことがある。本計画では、昭島の中の多様な主体というのはこういう団体であるとか、多様な課題はこういう課題があると具体的に整理して下さった。地域の特性、実情を踏まえてまとめて下さった。計画では、本来、施策のところが大事だと思うが、その根拠として、この地域ならではの、昭島ならではの、ということに基づいていることがとても大事だったと思った。

今日この会議に来る前、この主体の一つである「生涯学習サポーター」の養成講座に参加させていただいた。新たに来て下さった参加者の方、人数は多くないが、多様な世代の女性。自分のやりたいことを実現するために講座にいらっしゃった方もいれば、特にこれがやりたいというのはないが誰かの学びのお手伝いをしたいということでもいらっしゃった方もいた。既に活動されているサポーターの会の方と、これから何かやりたいという方の出会う場として、講座という形で交流されていた。お互いの関心や経験を聞き合うことで触発されて、今活動されている方から、今度こういうのをエンシスでやるからちょっと覗きに来てくれませんか、というように具体的に問いかねられると、これから何かやろうと思っただけでいらっしゃった方が、じゃあちょっと参加してみようかな、なんていうやりとりが生まれていた。そういうところから、この人作りとか縁作りというのができていくのかなというふうに、この計画策定に携わらせていただいたおかげで、そういう視点を持って関わることができた。

この計画の施策を具体的に展開していくという次のステップがあると思うが、これを絵に描いた餅にしないために、それぞれのところで引き取っていったらと思う。

副委員長：

この会では、様々な活動をされている方たちが普段抱えている問題やこうあってほしいというような願いを、かなり出し合えたと思う。出し合ったものの中で、今ある昭島市の中での団体や活動の形、どういう状況なのかということがかなり明らかになった。そして、それをさらに推進、盛り上げていくために、どういう取り組みをしていったらいいのか、どういう連携をしたらいいのかという方向が、皆さんの意見を反映する形で、一定程度この計画の中に折り込まれたという、そういう印象を強く思っている。

問題は、もう何人かの委員さんが指摘されたと思うが、これをどうやって生かしていくかということだと思う。生活コミュニティ課だけではなくて、全庁的にそれぞれが認識して取り組んでいかなければいけないのではないかと思う。また、実際にその活動を展開するのは市民となるわけだから、この計画を、具体的な活動の場でも、市民の方に機会あるごとにご理解をいただくような努力を、我々もしていかなければいけないのかもしれないが、市の施策の中でもそういう展開をしていってもらいたいという願いがある。

この会議に参加させてもらうまで、自分の会の中で、私自身悶々としていた部分について、狭い範囲でしか見ていなかったなと感じた。この会で皆さんの意見を聞いて勉強させてもらった。

### 3 その他

【 事務局より連絡事項を説明 】

### 4 閉会

委員長：

5回にわたる会議の運営、皆さんご協力ありがとうございました。予想以上に盛り上がり色々な議論ができたと思う。短い会議の時間で終わるかと思いきや、毎回、結構長い時間議論ができたと思っている。私も昭島に関わって10年ぐらい経っていると思うが、それでも知らなかった地域のことを、この委員会の中でよくわかった。皆さんが普段の活動の中で現場に寄り添って活動されているからこそ見えてくる現実というのは、そうなのかと感ずることがたくさんあった。

その中で、非常に強く感じたのは、社会が色々変わってくる中で、コミュニティのあり方というものもかなり変えていかないといけないのだろということ。高橋委員、幸田委員が教えてくださった自治会の現実。本当にご苦労されている中、そういった動きと共に、大山委員などがご紹介いただいた新しい動き、高田委員たちがやったような新しい動きみたいなものもある。そういったもの同士の接点がうまくいけば、少しずつ、ブラッシュアップというか、リニューアルされていくのかなという希望を感じるところもあった。

どうしても計画を作ろうとすると、課題を上げて問題を見つけて、それを解決するために計画を作るというパターンになってしまう。しかし、やはり皆さんすごく頑張っている。だから、課題を見つけてこれができてない、あれができてないというふうな指摘だけではなくて、私たち今結構やっているよねという、褒めるという事も大事ななと思っている。厳しい環境の中で、これだけやっているのだということを市民の皆さまに知っていただくという意味でも、この計画は機能すべきなのではないかと思っている。今回の大きなポイントである、お客さんではなく全員がここに関わろうと思ってやるとい

う参加の意識というものは、やっけていて楽しいとか、それですごく人と繋がれたとか、そういうものがないと続かない。コミュニティの良さを残しつつ、時代に合わせた形で変えていけるような、そういうきっかけになるような計画になればいいなと思う。

当然、計画なので、Todo リスト的な意味合いもあるが、何かやっけてるときにここに立ち帰って、自分たちの向かっている方向はこれでいいのかなというのを確認できる計画であってほしいと思っている。そういう意味で、皆さんが常に活動していく中で、あれってどうだったかなということを出せるような計画を作れたのではないかとっている。

それともう一つ、ここでこれだけ議論したこのメンバーの繋がりというのはすごく大事だと思う。元からご存知の方もいらっしゃると思うが、このことだったら大山委員に聞いてみようかなとか、岩下委員に聞いてみようかなというように、そういう関係が続くと会議があった意味合いがあると思っている。引き続き、この会議のネットワークが続くような、そんなふうになればいいなと思っている。私も含めて、この仲間に入れていただければと思う。